

[資料]

マルチプルインテリジェンスを用いた子どもの実態把握と学習づくり①
—子どもが学習方法を選択することを通して—

Assessment of children's and creating learning using multiple intelligence
—Through the child's choice of learning method—

砥 上 さ お り
Saori TOGAMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
教職教育高度実践力プログラム

(2024 年 1 月 31 日受理)

子どもが自律的に生きていくためには、自分の学びを主体的に選択する体験を集積することが必要である。OECD（経済協力開発機構）が示す「生徒エージェンシー」や、学習指導要領が示す「生きる力」においても、より良い社会を創造し自分の人生を豊かにしていくためには、自分自身の学びに主体的に関わっていく重要性が述べられている。しかし、現在の学校教育では、教師が提示するものだけで学習が完結し、子どもが自覚的に学びを進めている時間が少ない。受動的な学習ではなく、子どもが自分にあった学習方法を選べる環境を整えることが必要なのではないか。

そこで本研究では、Gardner のマルチプルインテリジェンスの概念をもとに、子どもが自分の学びを選択することを通して主体的な学びを支え、子どもが自律的に生きていくための方途を追究していく。本稿では、子どもが自らの可能性を自覚し学びの目標を設定することができるよう、自己を捉えなおすためのサポートについて考えていく。

キーワード： マルチプルインテリジェンス 自己選択 エージェンシー 生きる力

1 研究の目的

人間の学びは、多様な能力に支えられている。例えば、書きことばや話しことば、他者の経験や思いを想像する力などを含んだ他者と関わるための能力や身体能力を用いて行われている。しかし、現在の学校教育では教科書や板書などの読み書きに偏った学習方法を使用しており、多様な能力を用いて学んでいるとはいえないのではないだろうか。また、教師が提示するものだけで学習が完結し、子どもが自覚的に学びを進めている時間が少ない。受動的な学習ではなく、子どもが自分にあった学習方法を選べる環境を整えることが必要なのではないか。そこで、「生徒エージェンシー」が発揮できる環境を整えることについて考えていきたい。

人間の学びにとって重要になるのがこの「生徒エージェンシー」である。「生徒エージェンシー」

については、OECD（経済協力開発機構）の『ラーニングコンパス（学びの羅針盤）2030』（秋田他和訳「2030 年に向けた生徒エージェンシー」）で述べられている。「生徒エージェンシー」とは、「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」と示されている。この概念は、「生徒が自分の人生や周りの世界に対してポジティブな影響を与えうる能力と意志を持っているという原則」にもとづいている。また、「何をどのように学ぶかを決定することに積極的に関与するとき、生徒はより高い学習意欲を示し、学習の目標を立てるようになる」と明記されている。どのように学ぶかを教師が指定し、子どもが教師の意向を読み取り正解を探すような授業では「生徒エージェンシー」は育むことは難しい。子どもが学習の目標を自分で立て学習し、自分や社会に対してよりよく関わっていくためには、子どもが「どのように学ぶかを決定する」ことが必要である。

人間の学びについて『ラーニングコンパス（学びの羅針盤）2030』では、「生涯を通して使うことのできる「学び方」というかけがのないスキルを身につけていく」ことにもつながるとしている。このことは、社会に対して主体的に関わり、よりよい社会の実現のために生きていく力と捉えることができる。

人間の学びと今後の学校教育のあり方について、学習指導要領ではどのように示されているだろうか。平成 29 年度告示学習指導要領解説総則編において次のように示された。「複雑で予測困難な時代の中でも、児童一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合っていて関わり合い、自らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となることができるよう、教育を通してそのために必要な力を育てていくこと」が重視されている。これは「生きる力」である。「エージェンシー」の「変革を起こす」ために「責任ある行動をとる」ということと、「生きる力」の「主体的に向き合っていて関わり合い」ながら「未来の創り手」となっていくことは、目指す子どもの姿は類似するものがあるのではないかな。

「エージェンシー」と学習指導要領の関係について、松尾他(2019)では「新しい学習指導要領を実施していくことと、OECD ラーニングコンパス 2030 の枠組みによる教育を実施していくこととは、全く別ものではない」としている。また、OECD ラーニングコンパス 2030 の概念を参考にすることにより「より良い社会と幸福な人生を切り拓き、〔未来の創り手となる〕ための〔生きる力〕を日本の子供たちにはぐくむことが期待される」と述べられている。

以上のことから、今後の学校教育を考えていくにあたり、子どもが自律的に生きていくための力を育てていく方途を改めて捉え直す必要がある。本研究では、子どもが自律的に生きていくための力を育てていく方途について、子どもが自分自身の学びを選択することができる学習環境を整えることについて考えていきたい。なぜなら、自分の学びを自覚しながら自分で選択する体験を集積することが、自律的に生きていくこと、人生を自分で歩んでいく力を身につけることにつながるのではないかと考えるからだ。

本研究では学習環境について、次のように考える。

- ①子どもが自己を捉えなおせるようにサポートすること
- ②教師が学習活動を分析して、その活動のため

に必要な知識・思考・スキルなどを見いだすこと（これを、子どもの言葉として示し、手掛かりとなる教材も必要である。）

- ③①と②に基づき、教師が学習内容や目標、教材を複数準備すること
- ④①と②と③を用いて子ども自身が学習目標や学習方法を選ぶ体験を集積すること
- ⑤④の後に自己の学習を振り返って自分に何が必要なのか、それを見いだすためのリフレクションシートを開発すること

これらのうち、本稿では①の具体を提示する。本研究は、子どもが主体的に学ぶ方途を追究するものであり、そのための学習環境を見いだすものである。

なお、本研究では、児童に対する調査や実際を記載する。これらについては、様相観察も含めアンケート結果やインタビュー内容を取り上げるが、いずれも実施前に目的と論文などへの投稿について説明し、学校長を含め承諾を得ている。

2 研究の目的と方法

本研究の目的は、子どもが主体的に学ぶ方途を追究し、そのための学習環境を見いだすものである。その方法として、まず子どもが自己を捉えなおすためのサポートに関する理論研究を行う。次に、子どもを理解し、子どもの状態を捉えるためのアンケートとインタビューを実施する。

3 自己を捉えなおすことができるように子どもをサポートすることについて

(1)「マルチプルインテリジェンス」とその活用

①「マルチプルインテリジェンス」について

まず、Gardner が提唱した「マルチプルインテリジェンス」（この後 MI と記述）をもとに、子どもが自己を捉え直す手がかりについて考える。これは、先にあげた①に該当する。

Gardner は、MI の精神と対立するものとは「画一的な学校」であるとしている。この「画一的な学校」の本質は、「すべての個人は同じように扱われるべきだ」という信念をもち、「同じ教科を同じ方法で勉強し、同じ方法で評価されるべきだ」とすると述べている。これについて Gardner は、「どの二人の人も同じ種類の心をもってはいない。なぜなら、それぞれ、独自の構成で知能を組み立てるからである。」としている。だからこそ、差異を無視することは公平ではないと述べている。(p214~p215)そこで提案しているのが「個人ごとに設計された

教育」である。重要な要素は「個々の生徒の心、人となりを知ること」とあり、「観察し、考量に考量を重ね、生徒や生徒に近い人に問いかける」と述べられている。そして、「八つの能力に縛られずに、それを越えていく必要がある。というのは、それらはせいぜい最初の切り口にすぎないからである」（p216~p217）としている。

MI とは、人間がもっている多様な能力を8つにわけたものである。通常、これらの能力は単独ではなく、複合的に機能している。以下、8つの能力を示す。

【資料1：Gardner が示したの8つの能力】

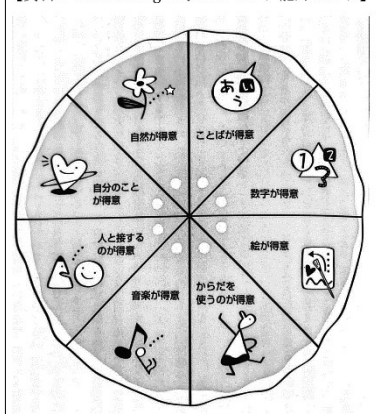
能力	具体例
「言語能力」 (ことばを話したり書いたりする力)	・読むこと、書くこと、 話すこと ・ことば遊びをする (ダジャレ、早口言葉など)
「論理的・数学的能力」 (計算することや順番など、 数字で考える力)	・実験する ・問いかける ・計算する ・パズルを解く
「空間能力」 (絵や色、形や立体、空間をとらえる力)	・デザインする ・描く ・イメージする ・いたずら書きをする
「身体・運動能力」 (体をつかってバランスをとる力)	・踊る ・走る ・飛ぶ ・つくる ・触る ・身振り、手振りをする
「音感能力」 (音楽を聴いたり歌ったり 演奏したりする力)	・歌う ・口笛を吹く ・鼻歌を歌う ・手足で拍子をとる ・聞く
「人間関係形成能力」 (他の人の気持ちを理解したり 読み取る力)	・リードする ・組織する ・関わる ・仲裁する
「自己観察・管理能力」 (自分の苦手なこと、 得意なことがわかる力)	・目標を設定する ・想像する ・計画する ・振り返る
「自然との共生」 (自然について知り、動物や植物を 世話する力)	・ペットと遊ぶ ・庭の手入れをする ・自然を観察する ・動物を育てる

(出典：Thomas Armstrong (2000). Multiple Intelligences in the Classroom. ASCD. (トーマス・アームストロング 吉田新一郎(訳) 梅村裕美(協力). (2002) 『マルチ能力が育む子どもの生きる力』、小学館)に基づき、筆者が整理した)

②「マルチプルインテリジェンス」の活用

このMIの概念を子どもと共有し、①アンケート調査、②インタビューを行うこととした。そこで、子どもと共有するために用いたものが、Armstrongの「マルチ能力のピザ」（この後「ピザ」と記述）である。

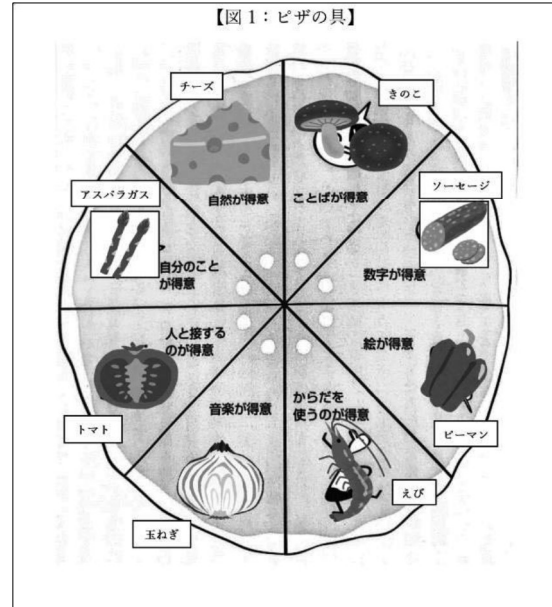
【資料2：Armstrong が示したマルチ能力のピザ】



「ピザ」とは、MI の考え方に基づいて作成されている。これは、子どもたちはピザが大好きなことから、学習の際に子どもたちが受け入れやすいように整理されたものである。

この Armstrong の作成した【資料2】を踏まえ、小学生にもわかりやすいように改変したものが、【図1】である。

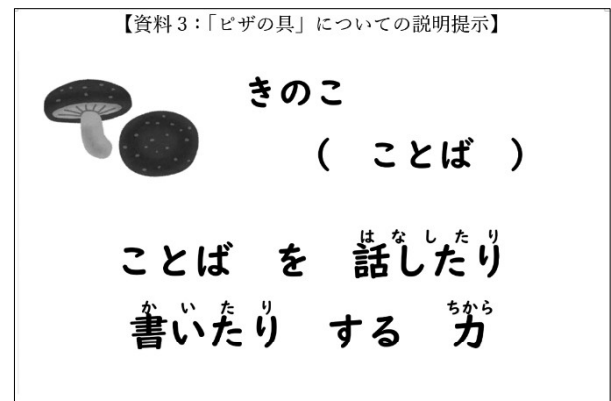
【図1：ピザの具】



【図1】は、MI の概念を用いた Armstrong の「ピザ」を、実際にピザで使用する材料に置き換えたものである。アンケートやインタビューでは【図1】を用いて、MI の概念を子どもと共有した。

これに加え、「ピザ」の具についてのサポート教材を作成し活用した。その際、涌井（2015）の『発達障害のあること UD な授業づくり 学び方にはコツがある！その子にあった学び方支援』（明治図書）をもとに MI の能力を子どもがわかりやすい言葉に変換した。その実際例が【資料3】である。

【資料3：「ピザの具」についての説明提示】



(2) 子どもたちの具体的な姿（アンケートとインタビュー）

① アンケート調査と結果

A) 実施日・対象者

2023 年 7 月に公立小学校の特別支援学級（情緒）において児童 4 名に行った。

B) アンケートの実施方法と具体

このアンケート調査は、子どもたち自身が MI の考え方に基づき自分自身の能力の可能性に気付くということを目的に行った。

実施に先立ち、アンケートの目的の説明を行った。説明内容は、「ピザの具」をもとに自分の中には色々な能力があるということ、一人一人が得意なことを見つけていこうというものである。その後、実践者が問題を読みあげながらアンケート調査を行った。問題の内容をひとつひとつ確認しながら答えられるように、学級担任を含め他 2 人の教師にサポートをお願いした。質問は、全 24 問（1 つの能力につき 3 つの質問項目）を行った。

以下、質問内容（抜粋）を示す。質問内容は、子どもの生活体験やイメージがしにくい語彙があることを考慮し、「ラジオ」や「何回か」などの語彙を子どもたちに合わせ改編を行った。アンケートは、『1「まったく当てはまらない」～6「とてもよく当てはまる」』の 6 段階に分けて記入するようにした。本稿では、その一部を提示する。「」内に示すものは、Gardner が示した 8 つの能力の名称である。（）内に示したものは、涌井（2015）から用いた名称である。

【資料 4：アンケート内容（抜粋）】

- 「言語能力」（ことば）
 ・車に乗ると外の景色よりも看板の文字を見ます。
 「論理的一数学的能力」（すうじ）
 ・暗算が得意です。
 ・数字を使って説明することがと得意です。
 「空間能力」（え）
 ・実際に見なくても頭の中に想像することができます。
 「身体一運動能力」（からだ）
 ・細かいものを作ることが得意です。
 ・お手本を見たり読んだりするよりも実際にやってみたくです。
 「音感能力」（おんがく）
 ・曲を 1 回か 2 回聞いただけで、歌うことができます。
 「人間関係形成能力」（ひと）
 ・お友達からよく相談されます。
 ・バレーボールや野球のようにみんなで運動をするほうが好きです。
 「自己観察・管理」（じぶん）
 ・自分のいいところと自分の苦手なことをしています。
 「自然との共生」（しぜん）
 ・魚釣りや野菜を育てることが好きです。

C) 結果

まず、アンケートの結果を以下に示す。

【表 1: アンケート結果】

学年	2A	2B	2C	4D
ことば	13	6	13	5
すうじ	8	16	16	13
え	16	13	18	8
からだ	6	15	16	8
おんがく	8	18	18	8
ひと	11	13	11	4
じぶん	18	18	17	11
しぜん	18	17	10	8

この結果は、子どもと共有した。アンケート結果はアセスメントの一つではあるが、それは教師側だけが保有するものではなく、その本人にも提示され、本人の自己理解とその後の学習に繋げる必要があるからである。

その結果、数値であらわれるアンケート結果をもとに、数値が低い項目（例えば、言語能力（ことば））について、「カタカナを練習したら、伸びるかな？」とカタカナを練習する様子が見られた。

このアンケートの回答捉えたことは、2 点ある。

1 点目は、自分の得意不得意について、子どもがその度合いを測ることは難しく、当てはまるか、当てはまらないかの 2 択となることである。これは、アンケートにおいて、1「まったく当てはまらない」と 6「とてもよく当てはまる」の数字が多かったことから見出せた。例えば、児童 2A のアンケートをみると 6「とてもよく当てはまる」が 24 問中 12 項目、1「まったく当てはまらない」が 24 問中 8 項目であった。他 3 人も同様に、1 か 6 で答えていることが多かった。

2 点目は、アンケートの数値や回答だけでは、子どもの思考を捉えることができないということだ。確かに数値で捉えられるサポート教材の利点は前述したように子どもにとっても、どの能力が得意なのかわかりやすい。しかし、どのような思考に基づいて考えながら、自己を捉えたのかということ子どもも教師も客観的に捉えることが難しい。特に、1 点目でもあげたように、子どもは当てはまる、当てはまらないの 2 択で回答をしている。そのため、子どもがなぜその数値をつけたのかという思考を辿ることができなかった。

そこで、アンケート調査だけではなく、子どもの思考にアプローチすることを意図して、以下のようなインタビューを行うこととした。

② インタビュー

A) 実施日・対象者

2023 年 10 月に公立小学校の特別支援学級（情緒）において児童 4 名に半構造化インタビューを行った。

B) インタビューの具体

このインタビューも、Armstrong の『マルチ能力が育む子どもの生きる力』（小学館）で示されている「子どもの『マルチ能力』を診断するチェックリスト」を参考にインタビュー内容項目を作成した。これは、子どもたちが「ピザ」に馴染みがあること、「ピザ」と内容項目が一致するためインタビュー内容を 8 つの能力で整理しなおすことができると考えたからである。実際のインタビューでは、すべての能力の項目から、子どもの日常生活の様子から当てはまる行動やイメージしやすい 2.3 個の質問を抜き出して尋ねた。

以下、インタビュー内容項目（抜粋）を示す。

【資料 5: インタビュー内容】

○得意なことは何ですか？ →「一番自信があることは何ですか？」
○苦手なことは何ですか？ →「困ることは何ですか？」
○好きなことは何ですか？
○嫌いなことは何ですか？ →「やりたくないことは何ですか？」
☆深堀質問
「言語能力」
○本は好きですか？
○難しい言葉とたくさん知っていますか？
○文章を書くことは、得意ですか？
「論理的・数学的能力」
○算数は得意ですか？好きですか？
○実験することは好きですか？
「空間能力」
○図工は好きですか？
○絵を描くのは得意ですか？
○らくがきを良くしますか？
「身体・運動能力」
○スポーツをしていますか？
○ものまねは得意ですか？
○何かをつくるのは得意ですか？
「音感能力」
○鼻歌をよくしますか？
○音楽は好きですか？
○普段、頭の中に音楽が流れていますか？
「人間関係形成能力」
○友達といることが好きですか？
○人が多いところは好きですか？
○人の手伝いをするのが好きですか？
「自己観察・管理能力」
○一人で遊ぶことが好きですか？
○自分のことが好きですか？
○自分の今の気持ちを説明することが得意ですか？
「自然との共生」
○自然の中が好きですか？
○動物は好きですか？
○たくさんの動物や、魚、虫について説明することができますか？

C) 結果

これらのインタビュー内容を逐語録に起こし、ピザをもとに整理を行った。

【表 2：インタビュー結果】

学年	①逐語録の内容及び②日常生活の様子 →得意な能力
2A	①・爬虫類が好き ・コモドオオトカゲについての説明をしていた。 ②・虫や動物への興味関心が高く、知識が豊富である。 ・よく図鑑を読んでいる。 → <u>自然との共生</u>
2B	①・自分自身のことについて話すことができる。 ②・「僕は、〇〇なんだよね」といった自分自身のことについて話すことが多い。 ・自分の心身の状態に、よく気付くことができる。 → <u>自己観察・管理能力</u>
2C	①・けん玉やドッチボールが得意 ・休み時間には、他学年とドッチボールをして遊んでいる。 ②・学校外では運動する習い事をしている。 ・体育科の授業では、学級の友人に教える様子が見られる。また、けがをした同級生に対して、手をつなぎながら「大丈夫？」と声を掛けながら保健室まで付き添っていた。 ・他者に対しての優しさを行動であらわす場面が多くみられる。 → <u>人間関係形成能力</u>
4D	①・理科の単元「筋肉の動き」や絵をみながら書くことが得意 ・困ったこと「ごちゃごちゃになって、喧嘩になってしまう」 ②・アイロンビーズやパズル、ブロックなどが得意である。 ・給食の野菜が苦手であるが、管理栄養士さんの「野菜の役割」を聞き、自ら口に運ぶ様子が見られた。 → <u>論理的・数学的能力</u>

これらのインタビューは、子どもがインタビューのイメージをもちやすいように、実践者が新聞記者役となって行った。その結果、日常生活のなかで話す口調ではなく「～ですよ」などの敬語で話

す様子がみられる児童がいた。この児童は、自分のことについて「なんかゆっくりしたいなってときしか一人になりません」や「難しいと言われると、頭がさずっと考えすぎて」と発言していた。このことから、言語能力や自己観察・管理能力が得意であると考えられる。また、他児童においても、実践者の靴下（けん玉などが載っている）に反応を示す様子から空間能力に関する力が働いていることや横になることでリラックスするという発言から身体・運動能力を同時に働かせることで言語能力が働きやすいのではないかなど様相観察から得られた情報もあった。

また、このインタビュー内容も子どもと共有を行った。これは、他者との違いのなかから自己を捉えなおし、子ども同士で認め合う機会とすることを目的とした。共有の際には、インタビュー内容の得意なことを筆者がキーワードとして抜き出し、このキーワードの得意なことは誰でしょうと当てる活動を行った。

③アンケートとインタビューから捉えられたこと
アンケートとインタビューから捉えられたことは次の3点である。

1点目は、子どもは自分のことをかなりの確に捉えている可能性があるということである。これはアンケート調査とインタビュー内容を比較し、子どもが自覚している得意な能力とインタビュー内容や日常生活の様子から考えられる得意な能力が、4人中3人が一致していたことから考えられた。また、インタビュー内容を共有した際に、自分の得意なことが書かれてあるキーワードをみながら「自分も得意だけど、〇〇君の方が得意だと思うんだよね」と話す様子があった。このことから、子どもたち一人一人は、他者と自分の違いを比べることができていることがわかった。これは、自分は何が得意なのかということを感じ取ることができていることから比べることができると考えた。

2点目は、このアンケートやインタビューにより、自己観察能力の高い子どもの見出しができることだ。自己観察能力の高い子どもは、説明内容が他者に伝わるかどうかということに関わりなく、自分はこうだと説明することができている。本人は自覚していないかもしれないが、自分のことを言語化することができるかどうかを見出すことについては、アンケートやインタビュー、特にインタビューは有効である。また、数値だけではなく、子ども自身の言葉で子どもを理解することも重要

である。これは、何より本人の尊厳を守るという点からも直接尋ねることは必要なことではないかと考える。

3点目は、学習づくりの手がかりとなることが見出せたことだ。その手がかりについてここでは2点述べる。1点は、学習方法の準備である。グループ活動だけではなく自分自身で学ぶ時間や誰かと協力して学ぶ時間の両方を設定するなど、得意な能力から参考にして学習方法を準備することである。もう1点は、活動内容の説明を曖昧な表現をさけること、会話の中で子どもの様子をみながら表現の言い換えを行うことである。

言い換えの必要性は、実施したインタビューの中で、教師が「自分の好きなところ」を聞くと、自分の好きなところは、(3秒)。うーん、(5秒)。自分の好きな面？(6秒)、自分の好きな面、自分の好きなこと、みたいなこと？」など、質問された言葉の意味が難しい様子から導出した。

(3)学習内容や活動の考案の際に考慮すること

実施したアンケートとインタビュー、加えて様相観察から得られた結果に基づき、学習内容や活動を考案する際に考慮する点として次の4点を見出した。

- ①具体的な選択肢から学習目標や学習方法を選択できるようにすること
- ②子どもが選択することを通して学習が進んでいくこと
- ③子ども同士で協力したり学びを共有したりすること
- ④教師の評価ではなく、自分や友達からの振り返りがあること

である。

これらについて、【表3】に、それぞれの具体内容を示す。

【表3：学習考案の際の考慮点】

項目	具体内容
①	<ul style="list-style-type: none"> ・単元を通してのポイント（「話す」「聞く」）や複数の学習方法（付箋を並べる、文章を書くなど）を用意する。 →学習を通して必要な資質能力を示したモニタリング教材が必要である。 ・教師が提示したものだけではなく子ども自身が考えて取り組むことができるよう「それ以外」という項目を加えるようにする。

②	・自分で選択したものが学習の中心となり、自分で考えた方法やこうしたい、これでやってみたいという子どもの考えをもとに授業を進めていく。これは、教師が学習の主体ではなく子どもが学習の主体として学びが成立するための方途である。
③	・一人一人の顔写真を磁石で貼れるようにして、学習目標や学習方法を板書で確認できるようにする。 →文字を読むことが苦手な児童も一目で他児童が何を選択したのか確認がしやすい。
④	・教師が子どもに対して「できた」「できなかった」という到達について評価するのではなく、子ども同士で「どこがよかったのか」など具体的に伝えあうことができるような活動を取り入れる。

4 研究のまとめ

(1) 本研究から捉えられたこと

本研究では、子どもが自己を捉えなおすことができるサポートとして、アンケート調査とインタビューを行った。そこで、子ども一人一人が自覚する得意とする能力は異なることがわかった。もちろん、これら「得意なMIの能力」はこの能力だけを用いて学んでいるというわけではない。例えば、自己観察能力が得意だった児童は、的確に表現する言語能力や自分の思考を整理する論理的-数学的能力も同様に得意であると推測することができる。このことから、Gardner が示しているように多様な能力を複合的に活用していることがわかった。これは、子どもをMIのひとつの能力に当てはめることはできないということである。また、この得意な能力を用いた学習方法をそのまま提示するものではない。学習方法押し付けるためのものではなく、子どもが自分にあった学びを選択するための一つの手掛かりとして、教師は複数の学習方法を準備するための手掛かりとして考える必要がある。必ずしも「得意な能力」が日常生活のすべてに現れるのではなく、それ以外の能力に関連することやものが含まれている。

人間の学びは多様な能力に支えられている。ゆえに、一つの能力に子どもの学びを当てはめ、教科書や板書などの読み書きに偏った学習指導をして

はならない。また、桃坂（2024）では「学習内容によって、自己に適した方法も変容する」と示している。そのため、教師は多様な教え方を身につけ、子どもが自身の得意とする能力や伸ばしたい能力に合わせて学習方法を選択できるように学習づくりを行う必要があるといえる。

子どもにとって、自己を捉えなおすということは生涯にわたって必要なスキルである。苦手なことやできないと感じているものが自己を否定するものではなく、自分を伸ばしたいという意欲やありのままの自分を認めるきっかけとなるのかによって、自己の捉え方が異なってくる。「自分にあった学習方法」を選択する体験を集積していくためには、提示された学習方法の中から学習方法を選択するだけでなく「なぜその方法を選択したのか」ということを自覚していることが必要なのではないかと気がついた。子どもが「なぜその方法を選択したのか」を自覚し、自分なりに説明できることが「自分にあった学び」を主体的に進めていく方途のひとつなのではないかと考えた。

(2) 今後の課題

今後の課題は、2点ある。

1 点目は、学習活動の分析を行い、学習の過程をモニタリングできるようなサポート教材を用いた授業づくりの考案である。これは、自己を捉えなおすためのサポートとして、日常生活の中や学習での具体的な場面とリンクさせた子どもにとって体験したことがある項目をたてることの必要性があったからである。そのため、アンケートやインタビューだけではなく、学習活動の分析を行い、必要な知識・思考・スキルを見いだしていく。

2 点目は、子どもが自分の学びを振り返るためのツールの開発である。これは、なぜその学習目標や学習方法を選択したのか子どもが自分をモニタリングすることで、自己を捉えながら学習を進めていく必要があるからである。自己の学びを振り返りながら学習を選択していくことは、主体的な学びにつながると考える。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研究の機会を提供し、協力していただいたすべての先生方、児童に心より感謝申し上げます。

主な引用・参考文献

- 秋田喜代美他, 「2030 年に向けた生徒エージェンシー」(Student Agency for 2030 仮訳), 2020 年 3 月時点
- 文部科学省, 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説総則編』, 平成 29 年 7 月
- 松尾直博, 柄本健太郎, 永田繁雄, 林尚示, 「「生きる力」とエージェンシー概念の検討ー中央教育審議会の答申や学習指導要領を中心にー」2019 年
- Howard. Gardner, “INTELLIGENCE REFRAMED Multiple Intelligences for the 21st Century”, New York: Basic Books
- ハワード・ガードナー, 松村暢隆(訳), 『MI: 個性を生かす多重知能の理論』, 2001 年, 新曜社
- Tomas.Armstrong, ”Multiple Intelligences in the Classroom”2nd Edision, ASCD, 2000
- トーマス・アームストロング, 吉田新一郎(訳) 梅林裕美(協力), 『マルチ能力が育む子どもの生きる力』2002 年, 小学館
- 涌井恵, 『発達障害のあることUDな授業づくり 学び方にはコツがある! その子にあった学び方支援』, 2015 年, 明治図書
- 日能研, 『8 つの知能(MI) で自分の可能性を見つめ直す』
http://www.nichinoken.co.jp/np5/nnk/multiple_in_telligences/mi/mi.html - top (最終閲覧日: 2023/08/17)
- 桃坂七海, 「『認知特性』に着目した主体的な学習の試み」, 2023 年, 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報 14 号